

ポリフォニーの二つのタイプについて

— DUCROT 理論の批判的検討の試み —

大 浜 博

1 序

本稿はフランスの言語学者 Oswald Ducrot が提唱したポリフォニー理論の批判的検討の試みである。ポリフォニー理論とは、現代言語学の暗黙の前提となっている「話者の単一性」の公理への問題提起である。ここで言う話者とは、発話行為という形で個々の言語活動を担う主体のことであり、その主体の単一性を問うことは、狭い意味での現代言語学批判に留まらず、近代以降の科学的合理主義の根底を問うことにもつながる重大な契機を含むものと言える。

話者の単一性に対する批判は、言語学においてよりも文学理論のほうが先んじている。本来音楽用語であったポリフォニーを言語の領域に導入したのはロシアの文芸批評家 Bakhtine であり、彼が問題としたのはもっぱら小説の多声構造であった。文学言語を対象として開発されたポリフォニーの概念は、Ducrot によって日常言語の分析装置となるわけだが、Bakhtine の理論との相違を彼は次のように語っている：

[...] 私の知る限り、Bakhtine のこの理論の適用対象は、常にテキスト、すなわち複数の発話の連鎖であり、これらテキストを構成している発話が対象となることはなかった。その結果、単独の発話はただ一つの声を発するとする公理を疑うまでには至らなかった。

言語には複数の声共存するというポリフォニーの問題意識では連続性を保ちつつも、Ducrot は Bakhtine とは明確に異なる姿勢を明らかにしている。無数の発話が織りなすテキストの次元の遙か手前に、すなわち前後の文脈から抽出された単独の発話レベルで既にポリフォニーは観察されるというのだ。さらに言うと、ポリフォニーは言語の社会・文化的コンテクストから生ずるという以前に、ラング自体に刻印された言語内的事実であるとするのが Ducrot の基本的立場であるようだ。

しかしながら、前述のように単独発話レベルに観察の視点を設定したかに見えつつも、Ducrot が言及するポリフォニーにはそこから逸脱した異質な事例が混在しているように思われる。ちなみにその主要なものを順不同で列挙すると、(1) アイロニー、(2) 自由間接話法、(3) 否定、(4) 疑問、(5) 前提、(6) 議論行為の結合子 (*puisque, certes... mais...*) に導かれる発話、(7) (直接話法を含む) いわゆる二重発話など、ポリフォニー現象は広範な領域にわたっている。なかでも、具体的な発話状況内で展開するディスクールにおいてのみ特定可能なアイロニーと、文法的事実として純粹にラングレベルに属すると考えられる否定が、隣り合わせで論じられることには大きな違和感がある。この違和感が本稿執筆のきっかけの一つであるが、ポリフォニー理論を概説する入門書等に見られる二つの対照的な傾向²⁾も、この違和感の根拠を傍証しているものと思われる。

Ducrot 自身はこれら諸現象の言語レベルの問題にはあまり関心を示していないのではないかと考えられるが、彼の発話行為理論が、むしろ意味論の領域へ語用論を統合しようとするもの (*Pragmatique intégrée*) である以上、分析対

1) Ducrot (1984), p. 171: «[...] cette théorie de Bakhtine, à ma connaissance, a toujours été appliquée à des textes, c'est-à-dire à des suites d'énoncés, jamais aux énoncés dont ces textes sont constitués. De sorte qu'elle n'a pas abouti à mettre en doute le postulat selon lequel un énoncé isolé fait entendre une seule voix.»

2) 例えば言語学入門の立場から書かれた Moeschler & Auchlin (1977) においては、そのポリフォニーを扱った章にアイロニー、自由間接話法への言及はなく、逆に、文学テキスト分析への言語学の応用を説く Maingueneau (1993) はアイロニーと自由間接話法にしか関心を示していない。

象のレベルの均質性は当然避けて通ることのできない問題であろう。本稿の目的は、Ducrot がポリフォニーの名で一括している諸現象には二種類のものが混在していることを示し、それぞれが全く異なるメカニズムに支配された現象であることを明らかにすることにあるが、今回の論考では Ducrot が言及する全てのポリフォニー現象を網羅的に検討するのではなく、代表事例として否定、疑問、アイロニー、自由間接話法に焦点化して論ずることにする。

2 ポリフォニーとは

2.1. 理論の輪郭：「話者」の多層性

発話行為のポリフォニー理論が、発話主体の単一性（「一発話＝一主体」）という「公理」に対する異議申し立てであったことは序で触れたが、従来「話者 *sujet parlant*」と称されてきた存在の中に、以下のような複数の異なる主体が区別されるべきであるというのがこの理論の出発点である。

- 1) *SUJET PARLANT*：発話の生理＝物理的生産に関わる主体で、現実界にその個体を特定できる経験的、歴史的な存在である（以後 SP と略記）。
- 2) *LOCUTEUR*：発話行為の主体であり、通常、発話内の一人称標識が指示するものと一致する（以後 L と略記）。さらに口頭の発話においては（直接話法の発話を除き）SP も L に一致するのが通常である。
- 3) *ÉNONCIATEUR*：発話行為の主の L とは性質を異にするもう一つの声の主である（以後 E と略記）。これは L によって発話行為の場に登場させられるが、必ずしも発話の再現ではなく、他者の視点（立場、態度など）として現れる。L はこれら E に対して、時にはそこから距離を取り、時にはそれに一体化することによって多様なポリフォニー効果を演出する。

まず最初に区別されるのが、発話の物理的な生産にのみ関わる経験的な主体である。Ducrot はこれを、生徒を学校行事に参加させる際、保護者の承諾を得

るために学校当局が使用する署名欄のみが空欄となっている同意書の例で説明している：「下記に署名する私…は、私の息子が…することに同意致します。署名…」³⁾ この文書は、例えばある父親がこの署名欄に署名をした瞬間から、その発話行為の責任主体が父親にあるものとして効力を発揮し始める。ところでこの文書を物理的に作成した人物（例えば事務官）は、現実世界に存在はするものの、この同意の効力とは何の関わりも持たない。このように物理的には発話の生産に参加しつつも、発話行為の世界に対してはその外部的な存在ではないものに旧来の呼称である話者（SP）をあてている。

この SP と根本的に対立するのが、発話行為の主体としての L であり、上の例では署名の主である父親である。通常、発話内の一人称標識は L と一致する。さらに口頭の発話においては SP も L に一致するのが普通である。しかし次に示すように直接話法の発話においては SP と L の分離が起き、一人称標識が単一の L には帰されずに階層化される現象が生ずる：

Pierre : 《Jean m'a dit : *Je viendrai.*》⁴⁾

(ピエール：「ジャンが僕に言った：僕は来るよ。」)

例文中の m' と Je はそれぞれピエールとジャンを指し、全体としてピエールを L とする一つの発話の内部にジャンを二番目の L とする発話が含まれることになる。このように一つの発話内で L が二重化し階層化される現象は、直接話法に留まるものではなく、Ducrot はこれらを二重発話 *double énonciation*⁵⁾ という一つのカテゴリーにまとめ、ポリフォニーの第一形態としている（しかしな

3) Ducrot (1984), p. 194.

4) *ibid.*, p. 196.

5) *ibid.*, p. 197, 198 : 二重発話の例として模倣的エコー (A : 《J'ai mal》 - B : 《J'ai mal : ne pense pas que tu vas m'attendrir comme ça.》 A : 「私、しんどい。」 - B : 「私、しんどい：なんていって、僕の同情を引くと思うなよ。」) や想像的ディスクール (《Si quelqu'un me disait *Je pars, je lui répondrais...*》 「もし誰かが、僕は帰る、などと言おうものなら、奴には…と行ってやる。」) などが挙げられている。

がら、この二重発話は Ducrot の関心の主要対象ではないようであり、今後、ポリフォニーの中心的な話題になることはない。

ところで発話の意味の中に示される情報の中には、発話行為の主の L とは性質を異にするもう一つの声の主である E (=ÉNONCIATEUR) がある。L の二重化によるポリフォニーの場合は、他者の言葉が具体的に再現されるが、E の声は必ずしも発話の再現ではなく、他者の視点、立場、態度として現れる。Ducrot はこれをポリフォニーの第二の形態とし、その具体例としてラシーヌの戯曲ブリタニキユスから、ネロの傍若無人の振る舞いをその人徳の故だとする心の友アルビーヌの言葉を揶揄するアグリッピーヌのせりふを引いている⁶⁾：

Et ce Néron, que la vertu conduit,

Fait enlever Junie au milieu de la nuit.

(「人徳に導かれたあのネロが夜の最中にジュニーをさらわせるのです。」)

このせりふ全体はアグリッピーヌのものであるが、その中の *la vertu conduit* (人徳に導かれた) は L (アグリッピーヌ) とは異なる E の視点、すなわち話し相手アルビーヌの視点である。このように L はその発話行為の場に、自らのものとは異なる視点の担い手 E を登場させ、L 自身はその視点を的外れなものとして距離を置き、その視点を引き受けることを拒むところにこのせりふに特有の効果 (アイロニー) を生んでいる⁷⁾

2.2. ポリフォニーの定義の曖昧性

直接話法などの二重発話において生じる第一形態のポリフォニー (L の二重化、階層化) は関心の対象から外れ、Ducrot は記述の対象を第二形態のポリフォニーに絞り込む。

6) *ibid.*, p. 204.

énonciateur の概念によって、[第一形態のポリフォニーよりも] ずっと頻繁に見られる第二形態のポリフォニーの記述が可能となる。[...] あるディスコースにおいては、locuteur のものと認められる特徴を持たない人物の声が聞こえることのほうがより頻繁なのだ⁸⁾

この引用部分と前節のブリタニキユスの例から分かるように、第二形態のポリフォニーはLとEの二つの声によって構成されるものであるはずである。しかしながら、Ducrot の関連論文を通して見ると、ポリフォニーにおけるEの働きは一様ではなく、必ずしもLとの対立、競合関係には留まらないことが分かる。例えば、Ducrot (1980) では、ポリフォニーについて、「locuteur の声とは区別された複数の声、あるいはある文法家達が「多声性」と呼んでいる、locuteur が責任を引き受けずにカッコ入れする言葉」(下線筆者)⁹⁾といった表現が見られ、またDucrot (1989) では「発話行為 énonciation は、相互に独立し、対話関係にあるさまざまな態度(視点)の演出として現れる」(下線筆者)¹⁰⁾

7) これら三つの主体 (SP, L, E) に加えて、発話行為主体のL自体が「そのものとしての発話行為主体 (L)」と「世界存在としての (λ)」に自己分裂をする場合がある。Ducrot はLとλについて、次のように述べている：《L est le responsable de l'énonciation, considéré uniquement en tant qu'il a cette propriété. λ est une personne 《complète》, qui possède, entre autres propriétés, celle d'être origine de l'énoncé — ce qui n'empêche pas que L et λ soient des êtres de discours constitués dans le sens de l'énoncé[...]》(Ducrot(1984), pp. 199-200) 「Lは、ひたすら発話行為の責任主体であるという特徴を持った者として、その限りでの存在である。λは「完全な」人物であり、様々な特徴を持つ傍らその中に発話の源であるという特徴をもったものである—だからといって、Lとλが発話の意味の中で構成されるディスコース的存在であることに変わりはない[...]」簡単に言えば、Lは行為の主体としての性質のみにより規定される対象化し得ない「私」であり、λは世界のなかの諸事象の一つとして記述の対象となりうる、すなわち対象化された「私」である。この区別の導入によって、発話者が自分自身を揶揄するような自己アイロニーの発話行為が説明できるようになる。

8) Ducrot (1984), p. 203: 《La notion d'énonciateur me permettra d'en décrire une seconde forme, beaucoup plus fréquente. [...] il est encore plus fréquent que l'on entende dans un discours la voix de quelqu'un qui n'a pas les propriétés que j'ai reconnues au locuteur.》

9) Ducrot (1980), p. 44: 《[...] une pluralité de voix, différentes de celle du locuteur, ou encore, comme disent certains grammairiens à propos des mots que le locuteur ne prend pas à son compte, mais met, explicitement ou non, entre guillemets, une 《polyphonie》.》

10) Ducrot (1989), p. 179: 《[...] l'énonciation apparaît comme la mise en scène de différentes attitudes — indépendantes les unes des autres ou qui dialoguent entre elles.》

などとあるように、単独のEとLの関係の他に、複数のEの呼応関係が関わるポリフォニーの存在が示唆されている。このように、ポリフォニーに言及する Ducrot 自身の言説のなかに、質を異にする二つの関係が渾然一体となって存在していることが指摘できる。そしてこの二つの全く異なる事実の混在の傾向は、言語学の概説書において、ポリフォニーについての次のような定義を生み出す結果を招いている。

ポリフォニーとは、[...] 発話はすべからく互いに異なる複数の発話行為的役柄を演出するものであるという事実のことであるが、locuteur はそれら役柄に一体化したり、しなかったりするものとして現れる¹¹⁾

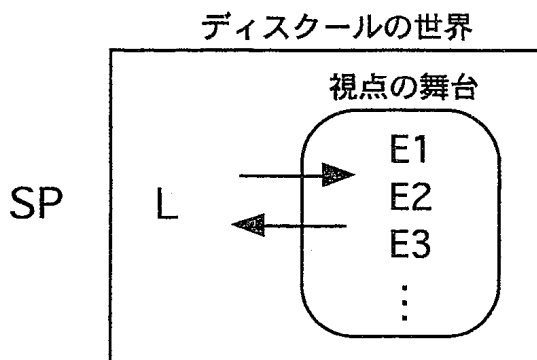
この定義では、上で区別した二つの関係（複数の énonciateurs (=発話行為的役柄) 間の呼応関係と locuteur と énonciateur との対立関係) が、あたかも一つのポリフォニー現象に帰せられる二つの特徴であるかのように記述されている。このような視点からの観察では、冒頭で列挙したさまざまなポリフォニーを発生させている内部的なメカニズムの異同は見えてこないであろう。我々は以下で各事例を個別的に検討するが、それに先だってここまでの考察を以下のようにまとめておく。

- (1) 発話の成立には3つの異なる主体 (SP, L, E) が関与するので、発話行為の所産である発話は構造的にポリフォニックである。
- (2) 3つの主体のうち SP はディスクール世界に対して外部的存在とされるので、ポリフォニーの発生に関わるのはLとEである。
- (3) ポリフォニー現象には、複数のEの呼応・対話関係によるものと、LとE

11) Moeschler & Auchlin(1997), p. 145: 《Polyphonie: [...] le fait que tout énoncé consiste en une mise en scène d'instances énonciatives distinctes, auxquelles le locuteur peut se présenter comme associé ou non.》

の分離・対立によるものの二種がある。

- (4) ポリフォニーの仕組みを一般化すると次のような図で示せる（右向きの矢印はLのEへの一体化であり，左向きの矢印はLのEからの離反である¹²⁾



3 二種類のポリフォニー

Ducrot 自身がポリフォニーに関して分類めいた発言をしているのは，第一形態と第二形態の区別のみであり，このうち前者は考察の対象から遠ざけられたことは既に見た。本稿の冒頭で示した事例(1)~(6)は第二形態のポリフォニーに該当し，Ducrot はそれらを特に区別することなく一括して扱ってきたことを考えると，このうちの否定とアイロニーに関して彼が次のようなコメントをしていることは注目に値する。

否定が，文の中に登録された「ラングの事実」であることを疑うものはいないだろう（一方，アイロニーについてはそのようなことは希である）¹³⁾

これは否定のポリフォニーとアイロニーのポリフォニーを区別することを意図した発言ではないが，我々が前節で導き出したポリフォニーの二つのカテゴ

12) LとEの一体化については，3.1.1. 否定の節，LとEの離反については，3.2.1. アイロニーの節をそれぞれ参照。

13) Ducrot (1984), p. 214: «Personne ne contestera que la négation soit un «fait de langue», inscrit dans la phrase (alors que c'est rarement le cas en ce qui concerne l'ironie).»

リー（複数のEの呼応・対話関係によるものと、LとEの分離・対立によるもの）は、それらがラングとディスクールのいずれの領域に属する言語事象であるかという点と相関しているように思われる。それでは、以下で否定、疑問、前提などの明らかにラングの事実と見なせる事例と、アイロニーや自由間接話法のようにどちらかといえばディスクールのレベルでその本領を見せる事例について、その内部構造に明確な違いがあることを示してみよう。ここでは前者の例として否定と疑問を、後者の例としてアイロニーと自由間接話法を取り上げる。

3.1. ラングのポリフォニー

3.1.1. 否定

ポリフォニー理論による否定発話の分析は、この理論が最も説得力をもった領域であると言えるであろう。否定発話は、ある場合には一定量の情報を担い、事態の描写（属性付与）に用いられることもあるが、一方で、それ自体では情報を担わず、何らかの事態を描写するとはいいがたい場合もある。次の二つの発話を比較してみよう¹⁴⁾

(1) Il n'y a pas un nuage dans le ciel. (「空には雲一つない。」)

(2) Ce mur n'est pas blanc. (「この壁は白くない。」)

前後の文脈を考慮しないとすれば、(1)は、空の晴れ渡った状況を描写しているのに対して、(2)は逆に、ある壁の様子を単に描写したものとは考えにくく、想定される先行発話（「この壁は白い」）への否定的応答でしかない。Ducrotは前者のタイプの否定を「記述的否定」、後者のタイプを「反論的否定」と呼び、対立させている。しかしある否定発話がいずれのタイプに属するかは、文脈ぬ

14) Ducrot (1972), p. 38.

きでは決定し難く、一般的には個々の否定発話は両タイプの解釈の可能性を内在させているといわねばならない。このような両義性をはらむ否定発話の機能をポリフォニー理論は次のように説明する。例えば、：

(3) Pierre n'est pas gentil. (「ピエールはいいやつじゃない。」)

においては、二つの異なる視点を担う E1 と E2 が設定され、それぞれ次の役割を担当する。

E1 : 《Pierre est gentil》 (「ピエールはいいやつだ」) という断定 assertion を行う。

E2 : 《Pierre n'est pas gentil》 という否定を行い、E1 に対立する。

発話(3)の発話行為主体である L は、E1 からは距離を置き、E2 に一体化することによって E1 の視点を拒絶する。このように、ある対象への何らかの属性付与ではなく、異なる視点の対立こそが否定の根本的な機能であるとされる。この説明は一見、アド・ホックな印象を与えるであろう。ある発話がそれとは反対の視点を想起させるのは否定発話に限ったことではないという反論が予想されるからだ。たとえば「ピエールはいいやつだ」といわれた人物が、「誰も悪いやつだなんて言ってないだろう」¹⁵⁾と言葉を返すような場合で、「ピエールはいいやつだ」の肯定発話の背面にも対立視点が想定されているのではないかという指摘である。もしそうだとすると、複数視点の対立は否定辞 *ne...pas* の機能ではないことになる。これに対して Ducrot は次のような例によって否定発話と肯定発話の非対称性を指摘し、E1 の存在を正当化する¹⁶⁾

15) Ducrot (1984), pp. 215.

16) *ibid.*, p. 216.

- (4) Pierre n'est pas gentil. Au contraire il est détestable.

(「ピエールはいいやつじゃない。それどころかひどいやつだ。」)

- (5) ? Pierre n'est pas gentil. Au contraire il est adorable.

(「ピエールはいいやつじゃない。それどころか素晴らしいやつだ。」)

(4)において(3)に後続させた「それどころか…」が受けているのは、否定発話の内容ではなく、その背面にある断定、すなわち E1 の視点（「ピエールはいいやつだ」）である。だから E1 と同じ方向性を持つ(5)の「素晴らしいやつだ」は、逆説の連結詞「それどころか」¹⁷⁾で接続させることができないのである。このことから E1 の存在が裏付けられ、否定発話における対立視点の存在は、肯定発話が文脈上想起させるような疑念、勘ぐりのレベルとは異なって、文に組み込まれた構造的事実であると主張されることになる。

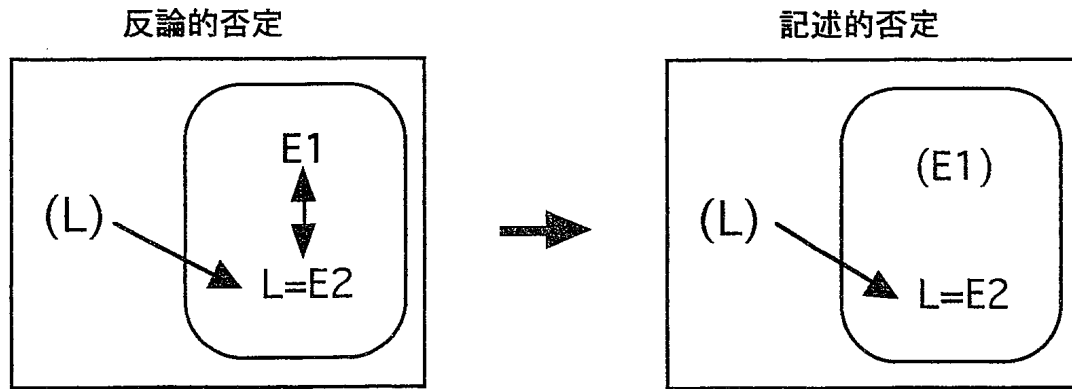
このように否定の機能は基本的に反論的なのであるが、上記(2)のように事態を描写する記述的否定の用法も存在する。すなわち(3)によって、それに対立する意見に反論するのではなく、《Pierre est méchant》（「ピエールは意地の悪いやつだ」）に相当するようなピエールの属性を叙述することもできる。これは否定の本来的機能による視点の対立という「出来事」が、慣用によりその出来事性、行為性を奪われ疑似属性化することで、Ducrot はこの現象を句発生的派生（*dérivé délocutif*）¹⁸⁾と呼んでいる。この場合、視点 E1 は抹消され、E2 のみが発現することになる。

反論的否定のポリフォニックな構造と、その記述的否定への派生は次のような図で示せるであろう¹⁹⁾：

17) *au contraire* の訳語としてあてた日本語の「それどころか」は、必ずしも逆説を表すものではなく、忠実な和訳ではない。*au contraire* は、字義通りには「それとは逆に」の意。

18) 「句発生的 *délocutif*」の用語については、Benveniste の論文《Les verbes délocutifs》を参照。Benveniste (1966), pp. 277-285.

19) 以下の図における (L) の表記は、L が E に一体化し、発話のポリフォニー性は複数視点 E1, E2 の呼応・対話関係によって担われることを示そうとするものである。



このように、否定のポリフォニーを構成しているのは、否定の視点 E2 とは区別された肯定の視点 E1 の存在であり、それらの呼応・対立関係である。

3.1.2. 疑問

否定発話 $\sim p$ がポリフォニーを構成したのは、L (=E2) が対立する p の視点 (E1) が存在したからであるが、それと同じように、疑問発話 Est-ce que p ? においても、p を断定する視点が設定され、それに L が対立することによりポリフォニーが現れる。ただし Ducrot によると疑問発話はこの p を断定する視点を含め、次の3つの視点の担い手によって構成されるという²⁰⁾

E1 : 予めの p の断定

E2 : p に関する疑念の表現

E3 : p か非 -p かの応答を相手に求める要請

そして疑問発話の場合も、E1 の存在は次のような例によって確認することが出来る。

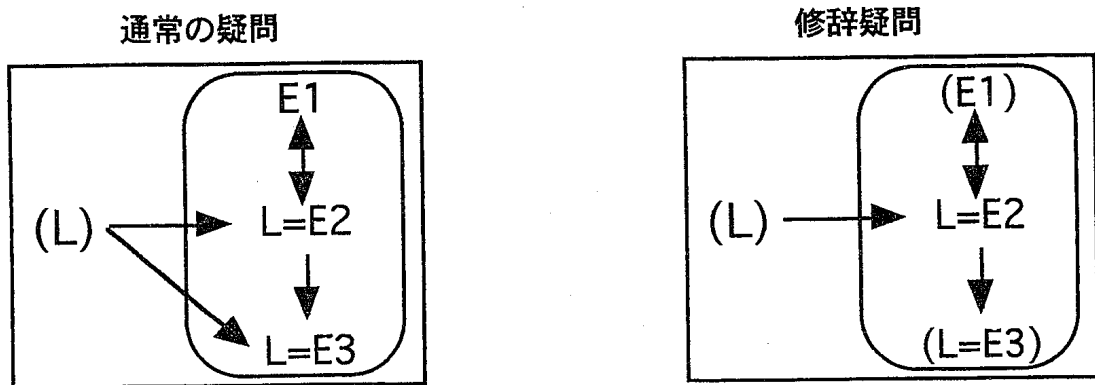
(6) Est-ce que tu seras des nôtres ce soir ? Ça me ferait plaisir.

(「今晚、僕たちのところにきてくれるかい。そうだと嬉しいんだけど。」)

20) Anscombe & Ducrot (1983), pp. 130-131.

(6)における照応の代名詞 ça (それ) は「(君が) 今晚家に来てくれる」という予めの断定の内容を受けているわけである。

また、疑問発話には肯定と否定の答を均等に期待し、純粹に情報をもとめる質問と、予め否定の答を予想しつつ敢えて発される修辞(論証)的疑問²¹⁾があるが、前者はLがpへの疑念を表現するE2と、その疑念の解消を求めるE3に一体化しつつ、pを断定するE1とは対立することにより、そして後者はLがE2のみに一体化することにより、それぞれ固有の解釈が引き出されることになる²²⁾ 否定の図解に準じて、疑問のポリフォニーを図示すると以下のようなになる(修辞疑問のE1, E3に付した()はそれらが発現していないことを示す)。



3.2. ディスクール内のポリフォニー

3.2.1. アイロニー

文のレベルにおいて(すなわちラングにおいて)ポリフォニーの発生が既に準備されているケースとして否定・疑問発話を見たが、その対極にあるのがアイロニー発話である。アイロニーがラングの事実として現れることは、皆無で

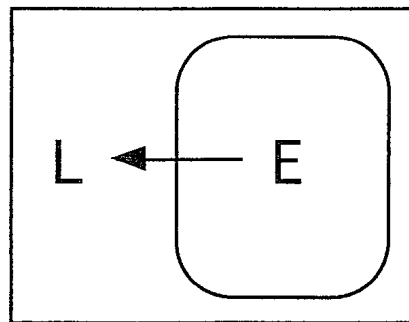
21) 例えば、《Tu ne devrais pas aller à l'hôtel X, d'ailleurs, est-ce qu'il est confortable ?》(Moeschler & Auchlin (1997: 148))。修辞的疑問には肯定の答を予想したもの(《Est-ce que je te l'ai rendu ton livre? Bon, alors laisse-moi tranquille.》(Ducrot 1983: 128))もあり、LとEの関係が若干異なるがここでは触れない。

22) この段落は説明を簡略化するため Moeschler & Auchlin (1997), p.148 に依った。

はないにしても、ごく希である（例えば辞書に登録された語彙レベルのアイロニー）。Bakhtine との関連で序でも触れておいたように、もし Ducrot がラングレベルの言語事実としてのポリフォニーを志向しているのであれば、否定、疑問などの事例とアイロニーを同列に扱うのは記述の均質性に問題が生じることになるのではないだろうか。ところが、Ducrot はアイロニーがディスクールの事実であることを認める一方で、それを否定と同列に論ずることに何のためらいも感じていないように思われる。

2.1. で第二形態のポリフォニーを説明するために引いたブリタニキユスの一節は、まさにアイロニーの例であるが、そこでは L（アグリッピーヌ）は自らの発話の中に、他者の視点 E（アルビーヌ）による声《la vertu conduit》（「人徳に導かれた」）を忍び込ませる。そして自らはその声が状況にそぐわないものであることを示しつつ、そこから距離を取ることによって主体を分裂（L と E への分裂）させ、ポリフォニー発話を発生させている。アイロニーにおけるポリフォニー発生の仕組みは次のような図で示すことが出来る。

アイロニー



すでに述べたとおり、アイロニーはラングに登録されるような言語事実ではない。従って、否定や疑問の場合と同じように《la vertu conduit》という発話の断片のなかに L や E の場所を求めても無駄である。すなわち L が、自らのものとは異なる視点の担い手 E を登場させるとは言っても、その E は例えば否定発話の L が対立した断定の視点 E1 のように発話の前提として内在的に存在しているのではなく、むしろ L が自らの発した言葉を異質なものとして排

除しつつそこから距離をとろうとするその遠心力が生み出すような視点である。ディスクールのポリフォニーとしてのこのダイナミズムは、Lの身体と共振し、アイロニー発話に付随する特有のイントネーションや表情、身振りなどの身体運動を誘発させる。このような特徴は、否定や疑問のような対話性のポリフォニーにはみられないものである。

3.2.2. 自由間接話法

自由間接話法とは、直接話法と間接話法の中間的存在で、間接話法の人称・法・時制を維持しながら、接続詞の *que* や *si* を省略し、多くの場合 *dire* (=言う) や *penser* (=思う) などの導入動詞を略して独立節の形をとり、さらに *maintenant* (=今), *aujourd'hui* (=今日) などの発話行為の(発話を発話時点に定位させる)副詞が半過去とともに用いられたりする話法である。このような混合形態をとる自由間接話法は、間接話法に特徴的な語り手(報告者)視点の語りと、直接話法に特徴的な作中人物(原話者)視点の混在を可能にする。

La Fontaine の『寓話』, 「靴直しと金融家」²³⁾から引かれた次の一文は、にわか長者になってしまつて恐慌を来した純朴な靴直しの狼狽ぶりを活写している。

(8) *Si quelque chat faisait du bruit,*

Le chat prenait l'argent...

(「どこかのネコが音を立てると、そら、ネコが金を盗んでいく、というわけ」²⁴⁾)

Ducrot はこの後半部は寓話作家の視点と作中人物の視点を一つの発話に融合させた自由間接話法であり、「ネコ」は作家の視点を描き出したもので、「盗んでいく」には靴直しの視点が現れていると言う。靴直しは物音がする度に、誰か

23) La Fontaine, *Fables*, VIII-2 《Le savetier et le financier》

24) 訳は La Fontaine 『寓話』(今野一雄訳) 岩波文庫によつた。

に金を盗まれるのでは、と怯えるのだが、寓話作家は、この「誰か」を罪もない一匹のネコに演じさせ、靴直しの狼狽振りを揶揄しているのだ。

ところでこの一節はもともと Bally (1912) において自由間接話法の例として論じられたもので、Bally はそこで Ducrot とは異なる分析の仕方をしている：《...Le chat prenait l'argent (c.-à-d. Il pensait : Le chat prend l'argent ; ...)》²⁵⁾ (「靴直しは考えた：ネコが金を盗んでいく、と。』) すなわち引用の後半部すべてが靴直しの視点に帰されるわけである。また Bally の見解とは逆に、(8)は自由間接話法などではないという主張もある。Moeschler & Reboul (1994) は、(8)を全体として見るとこれは前件と後件からなる条件文で、si 節の仮定に基づいて推測をめぐらす作家視点の語りに過ぎないという²⁶⁾ここでは、彼らの指摘の妥当性の議論に立ち入ることはしないが、このような多様な解釈を許してしまうところが自由間接話法の自由間接話法たる所以でもあろう。

問題の一節が Bally の言うように作中人物視点のみを反映したものであるとすれば、これは靴直しの妄想を描いているというような解釈になるであろうし、反対に Moeschler & Reboul のように自由間接話法を認めないとすると、靴直しの心中を突き放してみる客観描写になってしまう。前者は果たして原文の文体に含まれる揶揄の調子を十分に説明し得ているであろうか。また後者は、この愛すべき靴直しに注がれている作家 La Fontaine のまなざしを捉えきっているであろうか。この寓話を織りなしているユーモアとペーソスに適う解釈としてはいずれも隔靴搔痒の感を免れないところではなかろうか。

自由間接話法における L と E の振る舞いのユニークさは、L が単純に E に一体化するところにあるのではない。確かに自由間接話法といわれる発話の一部は、L と E の一体化によって説明できる場合もあるが、それはどちらかといえばバイイによる(8)の解釈の視点である。すなわち限りなく直接話法に接近し、語り手の声は極小になる。また逆に L が E から完全に離反し、語りの声

25) Bally (1912), p. 555.

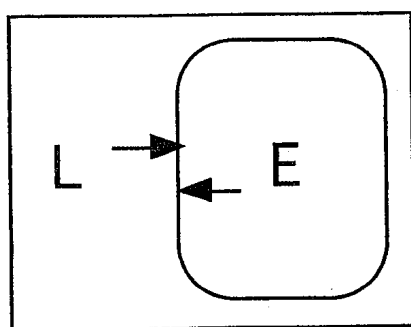
26) Moeschler & Reboul (1994), p. 337.

が極大化したものが、自由間接話法と作家の純粋な語りとの限界例になる。その意味で三様の解釈を許してしまう La Fontaine の例は、自由間接話法という文体の特徴を雄弁に物語っていると言える。

筆者はデュクロの解釈が示唆するところに基づき、自由間接話法を、LがEに接近しつつ同時に離反するという二つの動きの合力からなるものと考えることを提案する。そしてこの二つの相反する動きの中で、読み手が何処に自らを位置づけるかによってその解釈は定まるものであるとするのが適切であろう。従って、前節で論じたアイロニーと同様、自由間接話法がデイスクールの事実であることは明らかである。

ところで自由間接話法の中に、LとEの間の接近と離反という二つの動きを認めたということは、自由間接話法はそのメカニズム自体にアイロニーの契機を内在させていることにもなる。LのEからの離反が必ずしもアイロニーに直結するわけではないが、上の(8)の例に限っていえば、自由間接話法ならでのアイロニー効果がそこに現れていることは否定できない。このような仕組みをもつ自由間接話法は、次のように図式化することが出来るであろう。

自由間接話法



4 結 び

第3節の考察によって明らかになったことは、ポリフォニー現象がラングに属する場合（否定、疑問）と、デイスクールに属する場合（アイロニー、自由間接話法）とでは、その現象そのものの性質にはっきりと差異が認められるこ

とである。まず否定に代表されるラングレベルの事例を特徴づけているのは、複数のEの存在であり、そこにおけるポリフォニー（＝多様性）とはこのEの複数性のことである。しかもこれら複数の声はそれぞれが時系列上で相互に対立・呼応し合う関係にあり、いわば対話性のポリフォニーとなっているのが着目すべき点である。また、この対話性のポリフォニーを担う各Eの場所は既に文の意味の中に登録済みであるから、発話行為の主体としてのLは、予め準備された役柄（否定の場合はE2）に単に身を置くだけでLが視点を創出するのではないという意味で、ポリフォニーの構成に関わることはない。このようにラングレベルでの構造的なポリフォニーは、その対話性に加えて、LとEの完全な一体化（L=E）をその主たる特徴としている。

これとは対照的に、ディスクールレベルのアイロニーと自由間接話法においては、発話主体のLと視点Eとの分離・遊離がポリフォニーを出現させ、双方がその構成要素になっていることが指摘できる。すなわちラングのポリフォニーが複数視点の対話的な展開であったのに対して、ここでは一つの発話の発生源（帰属先）の二重化がポリフォニーと称されているわけである。そしてディスクールのポリフォニーはLによる発話行為とともに発生し、その効果もきわめて状況依存的である。

このように、Ducrotがポリフォニーの名で一括しているもののなかに、二つの異なるタイプが存在していることが示されたが、本稿の目的はそのいずれか一方を真正のポリフォニーとし他方を排除することにあるのではなく、あくまで両者のステータスの相違を明らかにすることであった。ただし、Bakhtineのポリフォニーとの差別化を徹底して、純粹に単一発話の多声性を問題にすることがDucrotの本来の目的であったとするならば「対話性のポリフォニー」は（狭義の）ポリフォニーではないことになる。否定、疑問、前提などの「結晶化した対話」²⁷⁾に観察される複数の声は、対話である以上、個別の主体にそれ

27) Ducrot (1984), p. 218.

ぞれ帰属させることができるからである。

Ducrot の姿勢に観察されるこのような一種の曖昧性は、彼のポリフォニー理論全体の整合性に何らかの影響を及ぼす可能性が予想され、事実、アイロニーと否定が共起する発話の分析においていくつかの障害に遭遇することになるが、ここではその点に立ち入ることはせず、稿を改めて論ずることにする。

*本稿は筆者が2001年4月から2002年3月にかけて関西学院大学で行った国内研修の成果の一部である。

参 考 文 献

- Bally Ch. (1912) : 《Le style indirect libre en français moderne, I et II》, in *Germanischen-Romanische Monatsschrift*, Heiderberg, pp. 549-556 et 597-606.
- Ducrot O. (1972) : *Dire et ne pas dire*, Principes de sémantique linguistique, Hermann.
- Ducrot O. et al. (1980) : *Les mots du discours*, Minuit.
- Ducrot O. (1984) : *Le dire et le dit*, Minuit.
- Ducrot O. (1989) : *Logique, structure, énonciation*, Minuit.
- Maingueneau D. (1993) : *Éléments de linguistique pour le texte littéraire*, Dunod.
- Moeschler J. & Reboul A. (1994) : *Dictionnaire encyclopédique de pragmatique*, Seuil.
- Moeschler J. & Auchlin A. (1997) : *Introduction à la linguistique contemporaine*, Armand Colin.